

サイクリング / 深井文浩さん(受講生)  
「自転車にハマリそうな予感・・・」



きっかけは、いろいろチャレンジしてきたマリンスポーツのなかで一番好きなヨット(ディンギー)と自転車に似ているのを感じたという程度の軽い気持ちでした。そろそろ陸にあがってみるかと思っていた折に「ライフスタイルデザインカレッジ」を知り、他の講座にも魅力を感じながらサイクリングを選んでいた。

第1回目。実にいろいろな自転車が用意されており、博学で自転車への愛情あふれる講師の皆様から親切に教えて頂きながら全モデルに試乗。まさに新たな世界が広がる思いでした。そうすると街中ですれ違う自転車達も多種多様であることに気づきます。

始まって3ヶ月目には、ついにロードバイクを買ってしまいました。その後の講座でフィッティングもしていただいたMYマシンは快適そのものです。ひとけのない川沿いを思い切り飛ばしてみれば、まるで強い横風を受けて帆走るヨットのよう。せっかく自転車を始めても長続きしない人も多いと聞きます。でもこの講座に参加すればダイジョブ。予定されているカリキュラムは胸躍るものばかり、そしてなにより受講生、講師の方々と交流できることがウレシイのです。

さて日常の足としても自転車を使い始めると、手軽で出先のスペースをあまり気にしなくてよい、燃料費がかからない(環境を汚さない)、健康にいい、とよいことづくめ。もっと若いうちに知っていれば・・・とも悔やまれますが、ま、とにかく経験できたことを幸いとしましょう。

今はまだピカピカで初心者マークのMY自転車ですが、はやく慣れて一人前の自転車乗りになりたい！これから開かれる講座を楽しみ、またその後も末永く自転車をエンジョイしていきたいと思います。

フライフィッシング / 鈴木元治さん(受講生)  
「キャッチ&リリース」



フライフィッシング(F.F)では、キャッチ&リリースという行為が一般的です。せっかく釣った魚を、苦勞して遡った川で釣ったせつかつの魚を、逃がしちゃう。逃がしちゃうからといって、魚に苦痛を与えた倫理的罪悪は免れませんが(Blood Sport なのですから)、少しでも苦痛がないように、少しでも早く元気になってくれるように、やさしく川に戻します。ちょっと偽善？かなりかっこつけてる？でも実際やってみると、キャッチしたら(これ前提)、リリースしたくなっちゃうんです。

9月13日未明、われわれ F.F カレッジの受講生並びにコーチ陣は、恒例の大井川源流釣行(1泊2日)のために、南アルプスの山懐を目指していました。日本列島を突き抜けて日本海に出ないかと心配するくらい車を走らせ、山深い湖の畔のバス停からマイクロに乗りかえたのは、すでに8時を回っていたでしょう。ここから、一般車両が進入禁止である、某企業所有の広葉樹林帯に1.5hrも入って行くわけです。景色サイコー、乗り心地??のマイクロバスは、南アルプス登山の基地として有名な二軒小屋ロッジが終点で、ここが本日の宿です。

今年は大井川源流の流量が少なく、初心者には遡行やポイントへのアプローチが比較的容易であった反面、魚に対するプレッシャーが高く、厳しい釣りになりました。それでも、8人の受講者のうち、5人までが自然渓流での釣果を得ること

ができ、講師の川野先生曰く“こんなの初めてじゃないか？”というくらい立派だったわけです。コーチ陣には、指導に時間を割いていただきあまりに、ご自分たちの釣りの時間が十分でなかったこと、甚だ申し訳なかったのです。もっともなかには、“さあ、本番(の夜の宴会の)のために、早く切り上げようか！”というコーチもいらっちゃったとか？

で、私も初めての渓魚、大井川の源流イワナとご対面で、いい年をして歓声を上げていました。清冽な流れに、広葉樹林のかぐわしい空気、狙って釣った快感。。。もちろんその後は流儀に従って、イワナをいたわりつつ、やさしく、やさしく、川に戻したのでした。

ネイチャーフォトグラフィー / 山崎善久さん(受講生)  
「自分の意図が写真を通して伝わる楽しさ」

コンデジを使ってからは、バシバシと数打ちゃ当たるとばかりに撮影をしていたのですが、なかなかお気に入りの写真が撮れない・・・そんな時に昨年のネイチャーフォトの受講生の写真を見せてもらったところ、かっこいいじゃないですか！これは何かあると思い今年の受講となりました。

これまでの講座では、毎回テーマを決めてみんなで撮影をして、それを講師の小川さんから講評してもらったり、時には受講生同士で感想を言い合ったりするんですが、自分の写真の時はちょっと恥ずかしいですね。ただ、写真としてはまだまだですが、それでも自分の意図したことが写真からみんなに伝わった時は、気分がいいですね。

これからの講座では、撮影のいろんなテクニックについても教えてもらって実践したいと思っています。また今年は、昨年のセッション以上に写真撮影ばかりではなく懇親会の方も盛り上がりそうなので、そちらも楽しみにしています。

さて、来年の春には、テクニックはさておき、自分のお気に入り一枚をみなさんに見てもらえるようにどんどん撮影して腕を上げますからご期待下さい。



ダッチオープンクッキング / 大石幸夫さん(受講生)  
「ダッチオープンクッキングによせて」

まず、受講したきっかけですが・・・米屋である私は、お米の良さを知ってもらおうと、店頭にお米を使った料理を並べて、来店客のみなさんに試食をもらう計画を立てていました。書店に料理の関係本を捜していたら、NHKの本があり、目が止まりました。ダッチオープンの料理番組に準ずるテキスト本でした。そのテキスト本に従って、ダッチオープン鍋を購入し、料理も本の通りに作っていました。でも一人で料理を作るのって、不安です。これで、いいのだろうか？って考えるのです。先生でもいたら、アドバイスをもらえるのに。パソコンの会(掛川ブログ村)を通じて、ダッチオープンを使った料理の講座があるのを知ったのは、ちょうどこの頃です。でも講座の雰囲気はどうかぁ～って、少し不安でした。何か、マニアの集まりをみたいな印象を受講生募集の紙面に感じとったのです。マニア同士、話が弾んで、私だけがカヤの外という場面を思い描いていました。それでも料理造りに参加したいという気持ちが勝って、受講する事にしました。いざ受講してみると・・・そんな私の不安なぞ、どこ吹く風。参加されたみなさんは、初めての方ばかりでした。

初日、会場内は期待と不安の空気が流れます。(私だけかな?) みなさん、顔を会わせるのは初めてだから。そんな、ぎこちない雰囲気を和らげたのは、講師の山村先生をはじめ、スタッフのみなさんの優しさでした。山村先生がコーヒーを沸かして、私たちをもてなしてくださいました。温かいコーヒーがノドを通して、おなかを暖めてくれます。山村先生が私たち初心者と同じ目線で語りかけられます。決して、「教えてやる」という、上から下へ見下す語り口でない事がコーヒーと一緒に周りを暖めます。

ダッチオープンの事、これからの日程の事、そして数多くの料理に挑戦すれば、自分のものになる事を語りかけてくださいました。私も含め、みなさん「やる気」モードにスイッチが入りました。いつのまにか、みんなでガンパローというムードに変化しました。そして、今・・・毎日が驚きの連続です。こんな料理も、あんな料理も、この鉄鍋で美味しく食べられます



自分でも出来たという喜びの声が、会場内で聞こえます。わからない事も、受講生同士で教えあったりして良い雰囲気です。受講前の「私一人だけ、カヤの外」という思いは、笑い話です。

万能調理器、ダッチオープンで作れる料理の種類が増えました。食生活に喜びを感じます。受講してヨカッタと、今は感謝の気持ちです。ずうっと、このまま、月に一回集まって楽しく受講できたらいいのという思いは、私だけではないでしょう。来年の5月で、この講座は終わりますが、みなさんと内容を濃く、有意義にすごしたいと思います。こんなに楽しい講座を設けてくださりまして、ありがとうございます。

オーガニックファーム / 宮崎光男さん(受講生)  
「中高年、人生を考える」

ある時新聞の折込に入っていた「掛川ライフスタイルデザインカレッジ」が目にとまったのがきっかけで、オーガニックファームを受講することになりました。

特にこれといった大きな理由があった訳でもないし、高い志があった訳でもないのですが、ただ50歳になる少し前頃から自分はこれから先、どんな生き方をしたいのだろうかという漠然とした思いがいつも頭に入り、何か感じるものがあったのだと思います。産地偽装や低給率のニュースなど頻りに耳にするようになって、家族の食べる分くらいは自分たちで作らなきゃなんよねと思うようになっていたこともこの講座に惹かれた理由なのでしょう。

体験講座の田植えから始めて、落ち葉を利用した堆肥の作り方、畑のトラクターかけ、根菜類の植付けや種まきと講座が進むにつれて、体のシンドさと労働後の清々しさを堪能できるようになりました。講師の平野さんやスタッフ、農援隊の皆さん等とワイワイガヤガヤやるのはとても楽しいものです。そんな中で私自身の将来像も半自給農と半分自分の仕事で成り立つような暮らしがいいなあ～と妙な妄想が湧くようになってきたのでした。クルマで走っている時に道路沿いに田畑があると注意深く観察するようになりました。草ぼうぼうで破れたビニールハウスなんかあったりすると、貸してくれば手入れするのになんて思ったり、今までやったこともないせに野菜の種を買ってきてプランターで栽培を始めたなんていうのもこれまでにない自身の変化です。

初心者のくせにやたらと能書をたれようとするのが中高年。お許しを乞い、これからはみんなで農作業を大いに楽しもうと思います。講師やスタッフの皆さんによる事前準備のたいへんさに感謝しつつ・・・。



おわりに

多くの皆さまに執筆のご協力をいただき、カレッジ通信 Vol.3 を発行できました。ありがとうございました。

また、この誌面については、冒頭にご案内したblogでもご覧いただけますので、どうぞご活用ください。(編集室より)